



歯科国試
パーフェクトマスター

全部床義歯 補綴学

西山雄一郎 著

第2版

令和5年版

歯科医師国家試験出題基準 対応



歯科医師国家試験

合格に

この1冊!



医歯薬出版株式会社

はじめに

全部床義歯補綴学とは、片顎または上下両顎のすべての歯を喪失した患者に対し、歯とその周囲組織を全部床義歯により補綴することで、形態と機能および外観を回復させるとともに、患者のQOLの維持・向上を図るために必要な理論と技術を考究する学問です。

わが国の65歳以上の高齢者人口は約3,640万人で、総人口に占める割合は29.1%となり、人口、割合ともに過去最高となりました(2022年3月15日現在)。この割合は今後も上昇を続け、2035年には3人に1人が高齢者になると見込まれ、諸外国に例をみないスピードで高齢化が進行しています。このような社会的背景からも、今後、ますますの無歯顎患者の増加が見込まれ、全部床義歯による補綴治療が高齢者の口腔環境を改善し、健康寿命の延伸に寄与することは大きな意義があると考えます。

このような社会情勢の変化に合わせて、令和5年版歯科医師国家試験出題基準では、「高齢化等による疾病構造の変化に伴う歯科診療の変化に関する内容」や「口腔機能の維持向上や摂食機能障害への歯科診療に関する内容」の項目について引き続き充実が図られていることから、歯科医師国家試験の出題傾向と内容が変容していることが理解できます。

以上を踏まえて、本書では下記に配慮した構成としました。

- ・標準的な全部床義歯補綴学の教科書『無歯顎補綴治療学第4版』(医歯薬出版)に準拠し、重要項目をできるだけ簡潔に記載しました。また、図表と写真を多用することで理解を促す一助としました。
- ・学術用語は、『歯科補綴学専門用語集 第5版』に準拠し、歯科医師国家試験出題基準との整合性を図り、かつ上述の出題傾向の変容に対応できる内容を加味しました。
- ・全部床義歯補綴学の総論と各論領域に加えて、特殊な装置による治療について簡潔かつ明瞭に記載しました。

本書が、これからの歯科医療を担う多くの歯学生に活用され、全部床義歯補綴学への理解が深まる助力となれば幸甚です。

本書のいくつかの写真は、鶴見大学 細井紀雄名誉教授と大久保力廣教授にご提供いただきました。ここに深く感謝の意を記します。

Check Point

- ・加齢・老化による口腔・顎顔面の変化を理解する。

I. 解剖学的, 組織学的変化 よくでる

A 骨

- ・多孔化（下顎骨重量の低下）
- ・顎骨の萎縮
- ・骨密度の低下（骨粗鬆症）
- ・骨塩量の低下（易骨折性）
- ・骨髓の線維化
- ・造血能の低下（脂肪髄）
- ・大口蓋孔の拡大
- ・上顎洞底-齒槽頂間距離の減少

B 粘膜

- ・角化の亢進による弾性（被圧縮性）の低下
- ・上皮下組織細胞の減少による菲薄化

C 舌

- ・緊張度の低下
- ・味蕾の減少→味覚の鈍化
- ・脂肪組織の増加（筋組織への脂肪浸潤）
- ・上皮の菲薄化
- ・上皮突起の減少

咬合器装着と顎路調節

Check Point

- ・咬合器装着と顎路調節を理解する。

I. 咬合器

A 咬合器の種類

1) 平線咬合器（蝶番咬合器）

- ・非顎路型
- ・咬頭嵌合位の再現を目的とした咬合器
- ・開閉運動のみが可能



平線咬合器
(細井紀雄先生提供)

2) 平均値咬合器

- ・顎路型
- ・解剖学的平均値に固定された咬合器
- ・Bonwill 三角（一辺約 10cm）（→ p.12 参照）を基準としている。
- ・矢状顎路傾斜角：30°
- ・平衡側の Bennett 角（側方顎路角）：15°
- ・Balkwill 角：20°
- ・矢状切歯路傾斜角：0～30°の範囲
- ・顎頭間距離：約 10 cm（4 インチ）
- ・上顎模型は咬合平面板を用いて咬合器装着する（→ p.86 参照）。
- ・フェイスボウトランスファーは必要ない。

角度可変機構あり



平均値咬合器
(細井紀雄先生提供)

金属床義歯による治療

Check Point

- ・ 金属床義歯による治療の特徴を理解する。

I. 金属床義歯の利点・欠点

1) 利点

- ・ 強度が高く、丈夫である。
 - ・ たわみが少ない。
 - ・ 熱伝導性がよい。
 - ・ 適合性と装着感に優れる。
 - ・ 舌房が広く確保できる
- 発音に有利

2) 欠点

- ・ 義歯床金属部分の調整が困難である。
- ・ 金属アレルギーを起こす場合がある。
- ・ 技工操作が煩雑である。
- ・ 高価である。



咬合面観



粘膜面観

■必修の基本的事項

大項目	中項目	小項目	本書対応 Chapter
5 人体の発生・成長・発達・加齢変化	エ 人体の加齢変化	a 細胞・組織・器官の形態的变化(口腔および顎骨を含む)	Chapter 1 p.1~5
		b 高齢期の生理的特徴	Chapter 1 p.5~6
8 診察の基本	オ 口腔・顎顔面の診察	a 顔貌, 顔色, 皮膚 b 口腔粘膜 c 舌 d 顎骨 e 唾液腺 f 顎関節	Chapter 6 p.44
11 治療の基礎・基本手技	セ 歯科材料・機器	b 診療用器械, 切削・研削工具・研磨材 c 印象用材料・機器 d 模型用材料, ワックス	Chapter 13 p.111 Chapter 8 p.57 Chapter 8 p.61, 67
12 一般教養の事項	ウ 歯科医療に必要な基本的医学英語		索引 p.168

■歯科医学総論

大項目	中項目	小項目	本書対応 Chapter
I 保健・医療と健康増進			
2 ライフステージ別にみた保健・福祉	オ 高齢者保健, 高齢者歯科保健	d 日常生活支援事業, 介護予防, フレイル対策【認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)】	Chapter 1 p.7
II 正常構造と機能, 発生, 成長, 発達, 加齢変化			
6 口腔・顎顔面の機能	イ 運動	a 下顎位, 咬合接触・咬合様式, 下顎運動	Chapter 2 p.8~13
7 人体の成長・発達・加齢変化	エ 口腔・顎顔面の加齢変化	a 器質的变化	Chapter 1 p.1~5
		b 機能的变化	Chapter 1 p.5~6
III 病因, 病態			
2 口腔・顎顔面領域の疾患の病因・病態	イ 歯の喪失に伴う変化・障害	a 口腔・顎顔面領域の変化・障害 b 全身への影響	Chapter 1 p.1~6 Chapter 1 p.7
V 診察			
5 高齢者への対応	イ 評価	f 要介護度, 介護状況【フレイル】 g Quality of Life (QOL) 【口腔関連 QOL】	Chapter 1 p.7 Chapter 6 p.45